

ガールズ&パンツァー 黒の革命旗

Acum

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西住流、島田流より強いといわれた赤城流の家元の子が日本戦車道の世界に革命の旋風を今起こす！

目次

第1話 過去と今 | 1

第2話 疑問と決意とチーム名 | 6

第1話 過去と今

私は海風が気持ち良い甲板の上で4人の仲間達と話をしていた。何年か前はこの何倍の仲間は居た。だが、みんな散り散りになってしまった。

彼らと再会する希望は少ないだろう。だからこそ私……赤城進は恨めしく思う、戦車道連盟を。

だからこそ……現実を変えるために私達は掲げる、革命の黒旗を。

4年前中学2年のとき私は初めて戦車道のチームを設立した。

何故なら私は赤城流の家元の子であるが故だった。普通は戦車道とは女子がやるものと世間は見ているが

実際は男がやろうとも問題は無いはずだ。と信じて私は進みチームを作り、仲間を集めて、チームを大きくした。

事実無敗で連戦連勝であった。

だがその結果は戦車道連盟にとってあまり喜ばしいことではなく、実際私のチーム日東（にっとう）は害虫扱ひされていた。

結果私はチーム設立から僅か1年と半年で連盟からチームが除名されることとなっ

た。

連盟の中ではことを穏便に、かつ自分達の手が汚れないようにしようとするのが大多数だったが、

それを聞き入れない上層部を牛耳る過激派が強行的に除名、マスコミでは連盟に対して大バッシングがあつたが

一般世論では戦車道を男がやるのは……という意見が一般的で男が戦車道をやることに対して理解を得られていなかった。

急速に自体は終息していった。結果、日本戦車道三大家 赤城 島田 西住 とまで言われた赤城は急速に廃れて知名度を失い

失われた流派と化した。

その後日東からは多数の脱会者が出て事実上の解散。

戦車は赤城家にて保管されることとなった。

その後何かを失つたかのように残りの中学生を送り、残った仲間4人と共学化した学園艦 大洗学園に入学することになった。

学園艦に引越す際に何を思ったのか私は乗っていた戦車を家から持ち出して赤城の名前で学園艦にある大型の貸し倉庫に預けた。

恐らく私は自身のあの頃の記憶を傍に置いておきたいのだろうと私は考えた。

実際私も私自身が何をしたいのかわからずいた。

それから2年、私は高校3年生になっていた。4人の仲間達とは相変わらず仲良く過ごしている

今日は珍しく皆揃っての登校だった。

道を歩くと新入生が大勢居る。この光景を見ると今から2年前に持ってきた私の戦車、ティーガーIIを思い出す。

何故私はあれを持ってきたのだろう・・・？と、一向に答えの出ないこと考えながら4人と登校していると

登校中の人ごみに普通は見かけないが見覚えのある顔の女の子が居た。

すると4人の一人 戦車道をやっていたときは操縦手で俺の相棒、副隊長をしていた谷口剣が立ち止まって口を開く

「おい赤城、あれってまさかとは思うけど西住姉妹の妹の方じゃないか？」と2年生の制服を着た見覚えのある人物

(ただし私達が見たのは別の制服だが)を指を指して言う

「確かに似ているね。だけどそれはないんじゃないか？西住流は確か黒森峰の方に居たと思うんだが・・・」

と考えながら話していると同じく戦車道をやっていたときからの付き合いの当時無

線士だった市原明海と

当時装填手の神埼茜も口を揃えて西住姉妹の妹だと言う。そこに当時砲撃手の速水 和也が口を開く

「もしここに西住姉妹の妹が居たとしたらそれは何かしらの深い事情があるってことだろ。それぐらい察しろ」

と的確な発言を入れると明海は

「おいおい・・・そんなんわかるわけねーだろ！」

と反応するが速水は

「まず君、女子にしては口汚いんだよね・・・そろそろそれ直そうよ」

「なにいいいいいいいいお前がそれを言うかああああ!?!」

「ちよつと待ってえええ! 2人とも喧嘩はダメだよ!」

と喧嘩になりかけたところで私達の中で唯一まともな神埼が仲裁に入る

「んだよ茜ー!」

「もう! 明海ももうそろそろ落ち着きなよ・・・ほら! 時計見て、もう時間無い!」

気づけば今から走っても遅刻ギリギリ見覚えのある彼女もどこかへ行っていた

やばい! それに気づいたときには時既に遅し焦った先ほどまで

冷静に思考していた私はどこかへすっ飛んで行き焦った私は口を開いて叫んだ

「やばいいいいいいいいいい!!! みんな急ぐぞ!」

すると全員で焦って全速力で走り始めた

こうして私達の、油と火薬と鉄の匂いの学生生活が再び始まるうとしていた。
そして私達はそれを知る由もなかったのであった・・・。

第2話 疑問と決意とチーム名

遅刻せずになんとか教室に辿りつけた自分は席につき一息つくことができた。

自分の席は大洗高校の生徒会長である、角谷杏の隣だ。

そんな彼女はいつもは朝早くから席について他の生徒と話をしているのだが、

今日は若干遅れた自分よりも遅れてやってきて席についた。

それから授業を受けて、その日の午前の授業が終わり俺は4人と一緒に食堂に行くことにした。

午前の授業が終わり腹もちょうど空いた食べ盛りの学生が一齐に

食堂に集まり、何世紀か前の戦争を連想できるような惨状となっていた。

そんな中私達は運よく列の前の方に並び、すぐに注文した分を受け取って食事を始めていた。

食事をしながらの会話は弾みに弾んだ。そして話題はある話題へと向かっていった。

「しっかし朝のあの子ホントに西住姉妹の妹だったのかなー?」

「んだとしてもよ!結局アタイらには何も関係ないじゃんかよ。剣?」

「確かに明海の言う通りなんだけどよくなんか引つかかるんだよね。」

「それはわかるけどよ……情報が少なすぎんだよ　実際アタイらが戦車道を離れてから何年経った？」

もう2、3年は経ってるんだよ。」

実際私達は戦車道から離れてもう何年も経っている。今の情報に疎くてもしようがないだろう。

もし仮に彼女が西住みほであるとするならば、何故大洗に来たのかというのは疑問になるだろう。

事実大洗には戦車道は無い、ということまで話は進み

そろそろ詮索するのは止めようということでのこの話題をやめると、時間も迫っていたということ各々食器を返却口へ返し

教室へ戻っていった。

その日の午後の授業には角谷杏は授業には参加しなかった。

授業が終わり帰り支度を始めようとしたときに放送が流れ始めた。

『生徒諸君に告ぐ、体育館に集合せよ。』

自分の周囲の席のクラスメートも何事かとハテナマークを頭に浮かべながら各々体育館に移動し始めていた。

体育館に行くと生徒がごった返していたなんとか全員が座る頃には生徒会の一人が

話を始めた。

「これより！学科オリエンテーションを始める。」

学科オリエンテーションに関して言えば、過去2年間よかったという印象はなかった。

なぜなら、基本的に大洗は近年共学化したばかりゆえ男子生徒の肩身は狭い。

学科はかなり絞られていた故に、今年もあまり期待せずにこの時間を過ごす事にした。

周りの生徒が真剣な眼差しで映像を見ているなか、周りを見ると自分以外にも複数の生徒は明らかにダレている。

と適当に色々考えたりしながら時間を潰すと、ようやく最後の動画になった。

自分も最後ぐらいは真面目に見ようと思いい顔を上げて真剣に見始めた。

最後の選択教科は（なんだこりや・・・）と自分でも思うレベルで意外なものが出てきた。

出てきた選択教科の動画は戦車道だった。

ここでふと疑問に思う、去年までこれは恒例行事で参加していたはずだが戦車道があつた記憶は

ないしこの学校で戦車道があつた記憶もない。生徒会の話によると何年か前に戦車

道をやっていたみたいだが、

廃止されていたみたいで、今年から再開することになったみたいだ。

だがここで私は違和感を覚える。

西住姉妹の妹らしき人物。

そして急な戦車道の開始。

この2つの情報が何を指しているのかは不明だが自分の中で疑問が生じた。

だが私はこの思考を一旦保留した、

何故なら、考えたところで何にもならないし

明らかに情報が足りなさ過ぎるからだ。

まあ後日生徒会長から直接話を聞くつもりだが………。

その日の帰り道4人達との話は戦車道一色となった

まあ最後に出されたインパクトもあるのだろう。私達も久しぶりに戦車を動かし

たいという感情になったが、

1両なんとか動かせる程度しかもう人員が居ないという。

話題になり寂しさを再度感じ沈黙という結果となった。

その暗い空気の中、明海が口を開く

「暗い話は止めだ止め!」

「こんな状態で暗い状態になるのは仕方ないだろう。こればかりは俺も暗くなるぞそんなお前はどうかんだ・・・?」

と俺は明海に問いかけた

「どうっていわれてもアタイ個人としてもすっげえ困るんだけど!?ただ・・・」

「ただ・・・?」

「今回のこの一件をアタイはアタイ達が向こうの世界に戻る起爆剤にできると私は思う・・・」

「なんだ・・・?向こうの世界に戻るなんて突拍子もない事を言い出して。自分達には

もう無理だろう?俺名義のチームはもう出られない。」

ここで明海はニヤリと笑い俺に言葉を返す。

「それは」公式にお前名義のチームが参加だけで別に名義が違って中もガラリと変われば別だろ?」

と返されて一同は困惑を隠せずに居た

そこで速水は

「君は何を言っているのかね・・・第一私達には人が居ないではないか。」

と反論する

「わっかんねーかな．．．．．速水！今年の高校戦車道の全国大会ってまだ始まって無
いって知ってたか？」

「まさか．．．．．」

ここで私は察し気づいた 彼女の考えていることは革命そのものだ！

「そのまさか、大洗Withアタイたちチームって名前で全国大会を荒らせば

たちまち私達は全国から目を集められるだろうよ そこで一気に世論を覆し

私達は元の世界に戻る！ だけど．．．」と明海は続ける

「問題がある．．．．．出て行ったメンバーはもう居ないんだ．．．．」

剣はクソツタレ！と叫び舗装路を蹴る

「なら．．．．．私達であの世界で革命を起こそうよ！たぶんだけど影ながら私達みた

いな

チームがあつて私達みたいな人たちが居るかもしれないよ！せめてその人たちでも

楽しく戦車道が出来るようにしようよ！」

「しかし．．．．．茜、君の話と明海の話と聞き限りそれはかなり博打に近い行為だ下手を

すれば次が無いさらに

成功するというのはもしもの話 ” たられば ” の話になる それはどう説明する？」

茜と明海は言葉に詰まる だが速水と剣は真逆であった

「赤城、もしもの話 たられば 次は無いと言っているが私達は落ちるところまで落ちた」

もはや失うものは無い。ここで一度勝負を仕掛けてみるのはどうだ？」

「そうだ赤城！俺達には後が無いなんて話、今更なんだ！次の戦車道の為にやろうぜ！」
と意外な援助に目を輝かせる茜と明海であった。

「わかった・・・明日辺りにでも生徒会長と話をしてこよう。それでチーム名はどうするんだ？たぶん日東は無理だぞ」

「ここで真つ先に出たのが明海

「ぶつちぎりゲリラズ！」

「襲撃、消耗させるはずが戦闘せずに追い抜いてるじゃん・・・」

「なら”冬将軍上等突撃隊”」

「夏を待てよ!？」

とこのようなハチャメチャな意見を全員から聞いては捌いての繰り返しだったが歴史に強い剣が

この状態を打破する意見を出した

「目的は革命！なら・・・」革命の黒旗”とかいいんじゃないか？」

「革命の黒旗・・・か。」

「そうだ！黒旗・・・アナキスト、無政府主義者の掲げる旗色　アナキズムは権威の潜在を望ましくない、必要でない、という考え方の思想の１つだ。

俺達だつて自由に戦車道をしていたがその中、戦車道連盟という権威が横槍を入れてきて

俺達はここまで落ちた！そこで俺達は俺達、そして俺達のような存在を救済するため
に

革命の風を起こす！主義思想はまるで俺達と同じじゃないか！このチーム名はどう
だ！赤城!？」

と剣は若干興奮気味に解説する

「いいじゃないか・・・？とりあえず聞くが、他に何かいい案はあるか？」

「それでいいんじゃないか？赤城。」

「逆に否定する要素なんてねえつつうの！」

「だよね！」

と皆も賛成の様子であつたためチーム名は決定

そして私は明日生徒会長に話をしに行くところまで決まった

というところでその日はかなり遅くまでその場で立ち話をしていたため全員は一時

帰宅

その日の夜 私は珍しく興奮してあまり眠れなかった